2020年度第３回豊岡市環境審議会　会議録

日時：2020年11月６日（金）午後１時30分～５時10分
会場：豊岡市役所５階　会議室５－１、５－２
出席した委員：山室敦嗣、雀部真理、内海京子、木築基弘、毛戸　勝、菅村定昌、土川忠浩
　　戸田勝之、中村　肇、西垣由佳子、洞田美津子、山田博文
欠席した委員：島﨑邦雄、野世英子、山下正明
事務局：コウノトリ共生部コウノトリ共生課
　　課長　宮下泰尚、係長　井上浩二、主事　戸田早苗

１　開会（司会：宮下課長）
・会議の公開、会議概要の公表を確認
・配布資料の確認

２　あいさつ
・山室会長より挨拶

３　協議（議長：山室会長）

【会長】協議に入りたい。事務局から説明をお願いする。

【事務局】本日の審議会で、2019年度環境報告書第２部と第６部のまとめ方について説明する。第１回審議会で出された意見を、事前配布した「環境報告書(案)」に反映しているので、目標像①の第２部から順番に行っていく。第６部は、本日の会議でいただく意見をまとめたものを審議会の意見とする。今回も第１回と同様に目標像ごとに時間を区切って審議する。
【会長】事務局から説明があったとおり第２部と第６部について審議する。目標像①から順に見ていくが、時間も限られるため、トピックスの内容や第１回審議会での質問への事務局の回答等を中心に審議していきたい。第６部については、事前に「市・市民・事業者」に対する評価や意見の記入用紙を配布しているので、それに基づいて意見をお願いしたい。８月に委員改選があったため、進行について不明な点があれば質問してほしい。
【事務局】すべての目標像に共通する項目から、変更箇所を伝える。まず、積み上げ棒グラフに合計値を太字で追加した。評価については、前回の審議で確認・修正いただいた評価案を反映している。また、評価の「この調子でがんばろう」のマークのみ画像が不鮮明なため、画像の差し替えを行う。

目標像①「手入れの行き届いた豊かな森が、きれいな空気や水を育んでいます」
【事務局】グラフ「間伐材供給量(朝来バイオマス発電所)」とグラフ「豊岡産ペレット販売量」の解説を整理した。販売量については、2019年８月で生産終了し、バイオマス発電所への供給に切

り替わった旨のみ記載。文章の変更に伴い、グラフの順番を変えている。グラフ「森林整備面積」の解説に、事業を所管する「事業主体」と実際に行う「実施主体」の両方を記載した。トピックスは、森林経営計画に基づく整備事業について記載しており、内容は北但東部森林組合に確認してもらっている。

【委員】グラフ「除間伐等実施面積」の解説を読むと、「豊かな森林＝木材を育てる」しか分からない。続く太陽の光が木の根元や地面まで十分に届く環境とは、生物多様性に配慮したことだが伝わらない。何のために太陽の光を届けるかというと草を生やすためなので、書き方を工夫できないか。例えば、草の生えている畑は０点だが、草の生えていない山も０点。トピックスの写真は、整備してすぐの写真でこれはこれで意味があるが、その数年後くらいのたくさん草が生えてきた状態のだと生物多様性に配慮した写真でなおよい。

【会長】写真の差し替えは可能か。

【事務局】ご指摘の写真があるか探してみる。

【委員】グラフ「豊岡産ペレット販売量」の解説で、2019 年８月末を以て生産を終了したとあるが、このグラフの掲載は今回で最後ということか。

【事務局】そのとおり。

【委員】市民でペレットストーブを持っている人は他のところからペレットを購入するのか。

【事務局】これまでは北但東部森林組合でペレットを作っていたためそこから購入していたが、生産しなくなったため他の市内業者から、市外産のペレットを購入している。

【会長】トピックス中に記載している、森林経営計画を進行中の３団体は具体的にどんな団体か。

【事務局】北但東部森林組合、豊岡森林、NextGreen 但馬の３団体。

【会長】記載しても構わないか。

【事務局】問題ないと思う。

【会長】目標像①の第６部に移る。市や市民、事業者に対して望むことなど意見をお願いしたい。

【委員】森林整備と多様性の理解を求める。森林における生態系サービスのすばらしさを伝えて森林の価値をみなさんに知ってもらわないといけない。除間伐制度をちゃんと知らない人がいる。それを知ってもらったうえで、切った木を放置するのではなく、これは市民の話かもしれないが切った木も価値があるので、どう使っていくかという話ができればいいと思う。事業者も丁寧に切ってもらってよかったが、使うところまでつなげてもらえるとありがたかい。

【委員】他の目標像（川や海等）に関して市がいろんな啓発事業をしているが、森林に関しても啓発事業をしているか。ペレットを通じた普及啓発がなくなるので、啓発の機会をなくさないためにも代わりに何か考えた方がいいと思う。

【事務局】子どもの野生復帰大作戦の事業の中で、山を使ったプログラムがある。子どもたちが竹を切り出して流しそうめんをしたり、山の中に木のブランコを作ったりしている。

【委員】環境教育のプログラムがあるということか。

【事務局】そのとおり。

【委員】自然体験と環境教育をもっとうまく絡めてほしい。

【委員】ペレット製造終了によりペレット利用も下火になってもいいのか、市内産以外を手配しても

ストーブ等で使っていくことをすすめるのか市の姿勢を教えて欲しい。例えばクリニックや銀行の待合室などに木質バイオマスストーブがあればいいのにと思う。市として薪ストーブも含めてそういった広報をしてほしい。

【事務局】ペレット生産は終了したが、ペレットストーブ・薪ストーブの設置補助は継続する。補助を通じて木質バイオマスの普及啓発につなげていきたい。

【会長】意見がいろいろ出たが、森林組合として市や市民に対しての要望等あれば。

【委員】森林活用の PR と利用は大切。市民への情報もまだ少なく、森林の価値と共に木の良さを PR することが重要なので森林組合や市が頑張る必要がある。

【会長】今まで出た意見をまとめて、後日委員に確認してもらいたい。

目標像②「里山が様々に利用され、関わる人が増えています」

【事務局】グラフ「農林業獣被害面積」の解説に、農家アンケートの結果を基にしており家庭菜園等の被害は含まれない旨を追加した。トピックスは、アップ神鍋のマウンテンバイクフィールドについて記載している。

【委員】グラフ「ラムあるき登山参加者」は、森林ツーリズムに位置付けられているという認識で間違いないか。

【事務局】そのとおり。ラムあるきという、来日山の登山イベントを５月の新緑登山と 10～11 月の雲海登山の２回行っている。来日山から円山川（ラムサールエリア）が一望できるため、ラムサール条約登録をきっかけに地元主催で実施している。

【委員】解説の「ラムサール条約湿地を眺めるイベント」のあとに「ラムあるき登山」と追加し、イコールだと分かるようにすればよい。

【会長】解説に、地元が主催であることも明記するようにしてください。

【委員】トピックスについて、マウンテンバイクコースの人気が出たからか、当初に聞いた以上にコースの範囲が広がっている。現時点でも想定していない箇所にコースが存在し、このまま広がり続けるとさらに大きな環境への影響が懸念される。今のうちに、自然とのバランスをとってほしいとはっきり示したい。ホテルもできることが決まり、人が増えることは確実なので、節度のある利用を心がけてほしい

【委員】環境保全との両立などの表現はどうか。

【事務局】ご意見を踏まえて文章を考える。

【会長】第６部についてご意見ください。

【委員】里山の利用に関して、これまで県が里山整備事業で各地に遊歩道を作っている。私が知るいくつかの場所は全て朽ちている。せっかく遊歩道があるなら利用しなければならない。地域も金銭的なことや労働力の問題があり、大半が知らん顔をしている。整備したのは県だが、利用するための手助けを市がしないといけないと思う。活用できているのは竹野南森林公園のみではないか。

【委員】竹野南森林公園も、世話をしていた方が高齢で、以前行っていた炭焼きも今はなくなった。できる範囲で継続してもらっているが今までのようには活用できていない。

【委員】毎年、福住地区公民館が床尾山登山イベントを行っていたが、事前に歩いてロープの修理な

ど安全確保をできる人がいなくなりイベントができなくなってしまった。参加を楽しみにしていた者としても、何とかならないかと思う。

【委員】子どもの頃、学年に応じて海や玄武洞などを目的地に長距離を歩いたり登山する行事があった。今もそういった行事はあるのか。地元の子どもたちが小さい時から、そういう場所を利用するという経験が必要。以前市外で山菜取りの女性がクマに襲われた事件があった。それから危ないということで、来日山の登山が中止になったとも聞く。今、小・中学校の遠足で登山等体験型のものはあるのか。

【事務局】子どもが出石幼稚園に通っていた時は、園の事業で有子山に登っていた。ただ、子どもが小・中学校に通っていた時に地元の山に登った記憶はない。

【委員】今も続いているかは不明だが、数年前まで少なくとも出石中学校は実施していた。

【委員】地元・地域で利用が進まないとどんどん忘れられていく。そういう利用・啓蒙が学校と連携できるといい。

【委員】子ども会が主体となって廃品回収をしているが、実際に参加しているのは大人になる。子どもが出てこないのは、大人がやらせないから。親が率先してやらせないといけないところ、親が止めている現状があると思う。教師も親も体験させたい気持ちはあるが、「危ない」「怪我をしたらどう責任をとるのか」と保護者が言った結果、活動できなくなっているというのもあるだろう。以前、祭りの話もあったが、こういう経験も子どもが参加しなくて廃れていっている。しかし、そういう経験が最終的には U ターンにつながることもあるはずだ。昔のように、低学年のうちから遠足で山に行く経験をしてほしい。子どもたちが利用するから、県も市も整備せざるを得ない、という方向に持って行かないと維持管理が続かない。近くの山へ遠足に行きましょうと啓発活動をする、という意見は出せる。市がここを整備したから使って、ということではない。地域からの「ここを使いたい」「ここに安全に行けるようにしてほしい」という意見や需要があってこそ、市や県の整備につながる。まずは、我々大人が、子どもたちの活動をおおらかに受け止めることができないだろうか、と投げかけることから始めてはどうか。

【会長】今の意見はとても大事なことで、第６部の意見に盛り込みたい。現状の把握が十分にできていないため、市内の低学年の遠足について調べてほしい。特に行先や整備された遊歩道等の活用の有無について、次年度に報告してほしい。

【委員】地域コミュニティと学校が連携して登山やハイキングなど野外活動をやろうとしている。寺坂地区では、床尾山に登っており、安全に上るために岩をどうにかしてほしいという要望を出す予定。

【会長】コミュニティと学校の連携の話は、目標像⑥の内容とも関わる。来年度のトピックスで「自然活動×コミュニティ」の取組みの例として取り上げられるかもしれない。

【委員】山を積極的に利用するのはいいことだが、シカが増えて、ヤマビルやダニも増えていることは覚えていてほしい。ヤマビルは血が出るだけで大したことはないが、マダニは死者も出ている。対策もきっちりした上で話をしないと危険。

【委員】リスクに厳しい世の中になっている。体験させたい保護者も一定数いるが、リスクに厳しい親の声の方が大きい傾向にある。

【委員】コロナと同じで、正しく恐れることが大事。間違った情報も含めてむやみに恐れるのでなく、きちんと知って対策を学ぶことが必要。

【委員】柿の実を放置すると熊がくるとよく聞くが、柿がほしい人と柿がいらない所有者をマッチングすることはできないか。また、何年も言い続けているが、シカ肉をもっと食べる方法を市と事業者が協力して何とかできないか。シカ肉のローストは上手に作るととてもおいしいので、スーパーの惣菜コーナーにあれば売れると思う。

【委員】給食で出すとか。

【委員】目標像の具体イメージに「肉や皮も多様に活用されています」とあるが、ジビエ料理の啓発とかは行っているのか。

【委員】利用するのはとてもいいことだが、獲った人でしか使えないなど肉の利用には制約がある。知り合いからも販売はできず物々交換をしていると聞く。保管の問題や調理の問題など制約が多くあり、なかなか出荷までたどり着けない。

【委員】２～３年前に調べた食品衛生法によると、都道府県の裁量に任されていた。

【委員】特定の加工場所がないと出荷できないから、欲しい知人に譲る程度しかできないと聞く。

【委員】何年か前に、城崎の旅館組合がジビエの勉強会を行った。商業ベースにのせるには、一定のレベルのものを安定供給できないといけないが、それが難しい。ジビエはもともとクセのある肉だが、処理の腕や技術で味がかなり変わってくる。レシピもいろいろ作っており、イベントで一時的な活用はできても継続的には難しい。

【委員】安定供給が難しいという点は、給食センターが使ってくれない理由と同じ。自然学校の煮込み料理に使うなどスポット的な活用なら可能かもしれない。

【委員】二次加工品にして販売しているところはある。ただ、誰でもできるわけではなく制約が大きすぎる。

【委員】情報提供として、出石町奥山で６月下旬に猟友会出石支部がシカ肉研究会を 10 年くらい実施している。

【委員】猟友会のように自分たちが獲った肉を自分たちで食べるのは問題がない。

【委員】これも毎回言っているが、森林葬・樹木葬が全国で増えている。豊岡の森の中に共有墓地を作って森林に訪れる人を増やせないか。以前、豊岡はまだまだ家制度だから需要がないと言われたが、子どもの同級生など若い世代をみていると、離婚して帰ってきた人も多く、名前を戻していない人はそのうちお墓に困るのでは。すぐに取り組めという話ではないが、研究だけでもしてみてもいいのではないかと思っている。

【委員】以前から言っているが、埋葬のことは尊厳に関わることであり個人の考えを否定はしないが「森の利用」とは話が違う。法律をクリアしながら行っているところもあるが、埋葬方法については、自然環境に関する議論の中で環境審議会が意見することではない。

【会長】ご意見を踏まえて、事務局と正副会長で協議して、皆さんに確認してもらう。

目標像③「使われていない農地の利用が進み、生きものの豊かな田んぼが増えています」

【事務局】グラフ「冬期湛水実施面積」の解説に、2019 年度実績の減少理由として「降雨・降雪が少なく取水が困難であった旨を記載した。グラフ「学校給食での地場産物利用率」はまだデータ

が出ていないが、豊岡産野菜の利用率が大幅に上がっているため、おそらく大幅に下がることはないと思われる。グラフ「農業スクール研修生」の解説に記載の「農業生産技術」を「生産技術」に、「経営管理能力」を「経営能力」に変更した。トピックスは、農業スクールの説明と研修内容や 2019 年度末時点の卒業生数などを紹介している。

【委員】「▲冬期湛水を行う水田が減少している」という評価は、減少理由が降雨及び降雪が少なく取水が困難だったという気象的な要因なら強いて挙げる必要はない。人的な要因であれば記載の必要もあるが、天候のことは対処できない。

【事務局】この評価は削除する。

【委員】グラフ「学校給食での豊岡産野菜利用率」は野菜のみでグラフ「学校給食での地場産物利用率」は肉や魚も含まれるということか。

【事務局】そのとおり。

【委員】学校給食の取り組みは思っていたより素晴らしい。ただ、市民に対しての訴えが足りていない点をもう少し意識してほしい。

【会長】第 6 部に移りたい。

【事務局】欠席の委員から意見を預かっている。「学校給食にコウノトリ育むお米が使われているが地元消費者への販売はほとんど伸びていない。市民にも実際に食べてもらい美味しさ・安全さを地域から伝えられるようにしてほしい」

【委員】地元消費が伸びていないことが分かるようなデータは掲載されているか。

【事務局】掲載していない。

【委員】データがあれば、市民にもっとコウノトリ育むお米を食べてほしいというメッセージにもなる。

【委員】地元の販売量は分かるか。

【委員】コウノトリ育むお米は個人農家が直接販売することもあるのか。

【事務局】そういう農家もある。販売量は拾えない。

【委員】JA たじまの販売量だけでも、コウノトリ育むお米販売量全体の中で地元の販売量がどれくらいになるか教えてほしい。

【事務局】JA たじまのデータを提供してもらえるか確認する。

【委員】人生 100 年といわれる中で、若い人の就農はもちろん大事だが、定年後の就農をサポートする仕組みがあれば面白いと思う。

【委員】都会から来てくれたら、こんな農地や空き家があると紹介するようなことはしているか。

【事務局】空き家は空き家バンクという仕組みで管理・紹介している。農地については、農業スクール生に対しては紹介していると思うが、一般にはしていない。

【委員】田んぼは難しいが、畑があると都会の人は喜ぶ。もちろん畑もすぐ使えるわけではないが、田んぼに比べるとハードルは低い。

【委員】コロナ禍で自然回帰や離れていても仕事ができるので、田舎暮らしが見直されつつある。また、目標像⑦でも出てくるが、水田ビオトープもあまり増えていない中で、慣行農法をしている人へのアプローチを市ができたらいいと思う。市民に対しても、都会の人が来た時に地域の人があたたかく迎えて、生活や野菜づくりの技術を伝えるような取組みや、ひきこもっ

てしまった若者を農業に誘って農福連携ができたらいいと思う。

【委員】県もワーケーション等で少しずつ地方に関われる人口を増やすようなデザインをしている。その中で畑の土地を少し借りれると一人ではできないから交流が生まれる。つながりを作ることが移住のきっかけになることもある。

【委員】休耕田を持て余している人と使いたい人のマッチングをするとすれば JA が主体となるのか。

【委員】それは個人同士でやる話。自身も土地の利用に困っており、昔は JA が行っていたが今はしていない。

【委員】ほったらかしの田んぼや畑の収穫量が実際どうなるか実験してくれる人はいないのか。

【委員】不耕起農業というのもある。管理の手を入れず、野菜自身の繁殖力に任せる。そのためには虫よけになるハーブを付近に増えるなど考えないといけない。収穫量は落ちるが、かかる手間を考えれば構わないという考えもある。

【事務局】近所に苗を植えてほったらかしの田んぼがあるが、米はなかった。

【委員】稲作は水の管理が重要だから、ほったらかしは向かない。

【委員】畑はわりと問題ないが、野生動物を呼びよせる可能性が高いため実際にはしていない。

【委員】学校給食で使うコウノトリ育むお米は、慣行農法米との差額を市が補填している。プラスして、若者農家から年数を限定して買うチャレンジ枠のようなものを作ってはどうか。新規農家が独り立ちできるように、例えば就農から３年、初年度から徐々に割合を減らしてその間に商売農家として基盤を作るようにできないか。今後を担う農家が作ったものを子どもたちが食べるということもいい話になる。せっかく 5,000 食もあるのだから活用してほしい。

【委員】コロナ支援策で実施された BUY 豊岡や EAT 豊岡を「地産地消」の視点でもっとＰＲしてほしかった。

【会長】農業スクール卒業生への支援策ややる気のある人を支えて、幅広くサポートする策を考えてほしいという意見を記載したい。

目標像④「あちこちの川や海辺で、子どもたちの楽しむ声がきこえてきます」

【事務局】グラフ「漁礁設置数」の解説に、漁礁設置数の減少理由として漁礁設置効果調査の実施や漁礁が大きくなったことなどを記載している。グラフ「河川の稚魚・貝放流補助金」の解説に、実施主体が市であることを明記。「(５)　清掃活動」の活動事例に、毎月実施されている谷山川清掃を追加した。トピックスは、前回の会議で提案があったように、アユの産卵場づくりと円山川とボート競技の２つ記載している。

【委員】市内では自然体験ができる事業者が増えており、川を使った活動も非常に増えている。グラフ「川の体験活動実施数(小学校)」はあくまでも学校が行った行事で、民間事業者の川での自然体験メニューについて掲載できればもっと実績が伸びるだろう。

【委員】データが集められないので掲載は難しい。

【委員】不法投棄が多い場所を掲載できないか。

【事務局】具体的な地区は分からないが、解説に記載のとおり峠や河川敷が多い。

【委員】そういう場所を文章だけでなく載せられないか。

【委員】逆に不法投棄しやすいスポットとして認識され、不法投棄が増えないか。

【委員】公表することできれいになるか、さらに増えるかどっちに転ぶかという懸念はある。だが、そういうところに目を向けてもらうというのも必要ではないか。

【委員】市外のある地域では、子どもたちも含め地域のボランティアがマップを作った。ごみの出し方が悪いとかポイ捨てが多いなどをマップ化すると意識するようになる。ただ、ホタルが美しい場所を教えると人が来すぎてホタルがいなくなるように、場合によっては場所を伝えることで環境が悪くなる可能性もある。

【委員】ごみは目につきにくいところに捨てられるから、目を向けてもらうようにするほうがいいのでは。

【委員】峠の不法投棄は、市外の建設業者等がダンプカーを乗り付けて一気に落として逃げるパターンが多い。城崎から竹野に抜ける峠の清掃をしたことがあるが、ひどいところは冷蔵庫、テレビ、タイヤなど大物が谷の底まで落ちている。人力で１、２個捨てているというようなレベルではない。

【委員】街中など周囲に人目が多いところでは意識を向けることがとても有効だが、人通りの少ないようなスポットは教えないほうがいい。

【会長】来年度のトピックスで地域のポイ捨て対策の取組みを紹介できるといい。

【委員】ボート競技に関するトピックスに城崎レガッタの写真が載っているが、本文中に一言も出てこない。毎年１回実施し全国大会にもチームを派遣するくらいの競技大会で、地元企業等もチームを組んで参加する。一文でもいいから城崎レガッタの説明を加えてほしい。

【会長】第６部についてご意見ください。

【委員】データはないが民間スクールがたくさんあるので、市民に対して活用しようという呼びかけができないか。インターネットで調べるだけでもカヌー教室とかたくさんあり活動している。市民が興味を持って使ってほしい。

【委員】川、特に礫河原や丸石河原の利用が非常に少なくなっている。理由は簡単で、そこにアクセスできないから。円山川では、ほぼ近づける河原がない。今、中郷遊水地を整備しており、その前面に大きな河原がある。私も要望するが、市も河原に行けるように要望してほしい。

【事務局】国交省に要望している。

【委員】ストーンペインティングが流行っている。そういう活動も事業に組み込んでほしい。石の観察はジオパークにもつながる。石を自分で探しに行くので大地の理解になり、大地を理解することが川を理解することにもなり、環境教育として非常にいい。ぜひ礫河原を利用してほしい。

【委員】以前から、日役等で刈った川べりの草が流れて最終的に港に迷惑をかけていることについて、前回の意見交換会でも日役で刈草の回収までしろというのは難しいという話がでていた。あとで処理する労力や費用を考えたら刈ってすぐ集めることにお金をかけたほうが合理的ではないか。

【事務局】後でまとめて、意見交換会ででた質問の回答をする予定だったが、その点について先に回答する。建設課・生活環境課・農林水産課など関係する部署に確認したところ、区に文書を出す際にお願いしているが受け入れてもらえない現状。地域の高齢化が進んでおりなかな

か手が回らないし地区もお金をかけてはくれない。きちんと回収してくれるところもあるが、大部分は刈り倒しっぱなし。

【委員】お金というのは区ではなく、公費のことか。

【事務局】区が草刈りをして「ここに集めたから取りに来て処分してほしい」と言われれば、市が人と車を出してクリーンパーク北但に持って行くということはしている。

【委員】草を集める労力が地元でかけられない。

【事務局】集める労力に関してお金を出すというのはしていない。それに全地区がそれをしてクリーンパーク北但にたくさんの草が持ち込まれてもパンクしてしまう。地元の苦しみも分かるが、こちらも全てを処理する能力・財政的余裕はない。

【委員】谷山川で特定外来生物オオフサモの駆除をしたら、国交省が集めたものを回収してくれる。今年３回連絡したら同じところに何度もできないと断られ、結局仲間内で造園会社に頼んで持って帰ってもらう手配をした。限られているということは理解できる。だから今あるシステムとは別に回収・運搬の新しい仕組みができれば。自分の地区を見ていても、何かしらのインセンティブがなければしないことはよく分かる。

目標像⑤「コウノトリも住める豊かな生態系が、バランス良く保たれています」

【事務局】グラフ「コウノトリ野外個体数」と「野外コウノトリの繁殖状況」を、2019 年度実績を反映したものに更新した。グラフ「小さな自然再生活動支援助成事業」の解説に、補助上限額が変わったことを追記。トピックスは、みどり豊かなふるさと大賞を内町環境保全組合が受賞したことを記載している。

【委員】内町と言われてもどこかが分からない。旧豊岡市の内町ということだと思うが記載を工夫してほしい。

【委員】出石地域にも内町区がある。

【事務局】「内町環境保全組合(奈佐地区)」に表記を変更する。

【委員】外来種駆除が進んでいないという評価の裏付けが見当たらないが、目標像②の有害鳥獣等の話に関わるのか。

【事務局】外来種駆除が進んでいないことについては、根拠データがない。

【委員】皆さんの感覚として外来種駆除が進んでいないということか。

【事務局】そのとおり。

【委員】一面セイタカアワダチソウが生えている写真でも載せれば伝わるだろうか。

【委員】オオキンケイギクなど外来種を具体的に書いたらもう少し分かりやすいかもしれない。

【委員】ここでいう外来種は植物のことか。

【委員】植物もアメリカザリガニ等の生物も含めた全部のことを言っている。

【委員】データの出しようがない。

【委員】感覚的なことしか言えない。

【委員】以前、外来種の一覧を作った。それが豊岡市の植物の何%にあたるかくらいなら出せる。

【会長】そのデータをいただきたい。

【委員】コウノトリはザリガニや魚など外来種を食べないのか。

【委員】コウノトリは外来種を食べる。ザリガニは好物。鳴門市に大量にいて主食になっている。

【委員】そういう情報を皆さんに伝えて、外来種をつかまえてもらいコウノトリの郷公園に持って行って餌にする、というのはどうか。

【委員】外来種を駆除するときは、移動しないという基本がある。特定外来生物に関しては移動そのものが禁じられており、アメリカザリガニも要注意外来生物になっている。他の土地では積極的に駆除している。

【委員】豊岡市で条例を作ってできるようにできないか。外来種の駆除は進めたいが進めるには何かご褒美がないと。コウノトリが食べてくれるということなら市民もやる気にもなるのでは。

【委員】きっちり考え方の整理をしないと難しい。

【委員】豊岡市内で見られる外来種を地道に広報していく。ハチゴロウの戸島湿地で定置網を仕掛けて生きもの調査をしている。ブルーギルやブラックバス、ミシシッピアカミミガメが捕まるので湿地に戻さずに殺処分している。意見交換会で、オオキンケイギクの話があったが、あれこそ知らない人が見たら河原にきれいな花が咲いていると思うだけなので、そういう啓蒙が必要。誰が駆除するかの問題はあるが、少なくとも広がらないようにすることも大事。

【委員】私の地区では、オオキンケイギクがわざわざ残してある。電話をして種が飛ぶ前に刈ってほしいと頼んだことがある。草刈り時期の前に区長や住民に外来種の種類と対策も併せて周知が必要。根から抜けなくてもせめて繁殖しないように。

【会長】外来種一覧には対策も載っているか。

【委員】具体的な対策は書いていない。

【会長】対策も記載した形にバージョンアップしていくようなことは可能か。

【委員】環境省や国土交通省が外来種対策をホームページに載せているものもあるが難しい。

【事務局】オオキンケイギクについては市のホームページで、草刈りをしてほしいと周知したが全体的にはまだまだできていない。

【委員】紙媒体を作るのは大変なので、ホームページで地道にあげてもらうのがいいと思う。

【委員】区長を対象にした市政懇談会で市長が１時間講演をする。その中に外来種の話もいれてほしい。最後に必ず流す数分の映像があるが、これだけ「自然との共生」「コウノトリ」というなら１分でもいいから外来種対策に時間を割いてほしい。各地域を回って春と秋の２回全区長が聞くのだから、そういう場で言ってほしい。

【委員】目標像の中で、防獣ネットに絡まるなどけがをするコウノトリについては一切触れてない。それでいいのか。農家に周知もしているのだろうから、「コウノトリの増加につれて、怪我するコウノトリが増えている」「網の張り方を徹底してほしい」など触れた方がいいのではないか。

【委員】コウノトリのけがは、認知不足による人間の行為が原因か。啓発できるようなことがあるのか。

【事務局】全てが人的要因ではないが、防獣ネットがたるんで地面に広がっていると、山際で採餌する際に絡まりやすいなどはある。ネットをピンと張ってもらえばコウノトリは絡まりにくくなる。そのことは農会にチラシを配って周知している。審議会の意見として対策を強化してほしいと記載することでいいか。

【委員】それで構わない。

目標像⑥「様々な世代の人々が、地域の祭りや行事を楽しみ、未来へとつなげていきます」

【事務局】「(３)　地域コミュニティ」で、各コミュニティの活動で特に目標像に一致するもの(幅広い年代の交流・地域の祭り)を事例として取り上げている。「2019 年度地域コミュニティ組織活動事例集」から抜き出し、該当する地域コミュニティも掲載内容を確認している。トピックスは、市立歴史博物館-但馬国府・国分寺館-のリニューアルについて記載している。

【委員】コミュニティも四苦八苦しているが参加してくれる子どもの数が減っている。子どもたちに何がしたいか聞いて実現する企画までしているが、子どもも何も言わない。何をしてあげたら子どもたちが喜ぶかと模索している。子どもたちも習い事やゲームなど地域活動のライバルが多い。具体イメージで、子どもたちが「参加して」という表現になっているが現実的にはどうやって関わらせるかが大きな課題。この目標像には小さな子どもを育てている母親の存在があまりでてこないが、一番苦労していると思っている。地域の行事で若いお母さんがお酒を飲んで楽しむ、後片付けは高齢者も含めて全部男性がするようなことがあってもいいのでは。子どもや若いお母さんを喜ばせてあげる行事があると地域はよくなっていくと思う。特に結婚で転入してきた女性の居心地がいい地域であれば、包容力も支える力もあって、子どもも増え学校もよくなる。主役が若い母親と子どもになっている地域は、きっと持続可能な社会。

【委員】私の地域では子どもが祭りに参加するとお金がもらえる。

【委員】祭りに参加したくてやっている子はいない。

【委員】中学生になると祭りで傘持ちをする。大きい傘を持って約３時間歩いたら 5000 円もらえる。子どもの数が少ないからこそできる事ではあるが、お金がもらえるから参加してくれる。

【委員】何かしようと思ったら利益がないと、誰かのためにというのはむずかしい。何がしたいか聞いて答えが返ってくることはあり得ない。何が子どもにとって良いのか、特典になるのかが大事。金銭の特典は賛否両論だと思うが、何か特典は与えた方がいい。

【委員】きっかけは「特典」。行く動機となり、参加するうちにだんだん地域の良さにほだされていく。

【委員】子どもたちは何がやりたいかでなく、子どもたちにとって利益になるものをしっかり考えながら行事をする必要がある。歴史博物館のリニューアルについて記載があるが、子どもたちにとって得になるのか考えないといけない。新しくなって良かったねと思うのは大人だけ。ここに行くことで子どもに何の利益があるのか。例えば期間限定で来館した子どもがくじを引けるなど。行政は難しいだろうが、そういうことで行く動機にしてもらうことが大事ではないか。特典目当てで行ったときに、こういう歴史があったなとか気づいてもらう。行政ができないなら地域にしてもらう。そういうことを考えてほしい。女性は大変で、それを支える我々があれしろこれしろというからだめ。女性の特典になるものができれば、もう一つ上の段階に上がれるのでは。

【委員】小学校高学年くらいになると自立心が出てくる。そこで親が強制すると嫌な思い出にしかならない。お小遣いとか何か特典をきっかけに祭りに関わることで楽しい記憶になる。それが地域に帰ることにもつながる。子どもたちはこれが将来役に立つとかそういう判断力はな

い。出石のように祭りががっつりある地域は、U ターン率が高い。関わるうちに好きになって自分ごとになっている印象がある。必ずしも子どもたちがやりたいことでなくても、きっかけを与えて関わるうちにどこかで経験が生きたり未来につながる。

【会長】第 6 部のこともすでに話してもらっているので、このまま進める。

【委員】外国から働きに来ている人が増えている。技能実習生はずっといるわけではないが、地域行事に巻き込んでいったらいいのではないか。ベトナム人女性と友だちになったが、お弁当もベトナム人で固まって食べていて日本人との交流がないと聞いた。日本人と話す機会が少ないから日本語を話す力も伸びない。多様性を広げられるのに一緒に活動しないのはもったいないと思う。事業所のみんなで祭りに行こうと商工会から広報してほしい。

【委員】25 歳同窓会という 12 月 30 日に豊岡へ帰ってくる事業があったが、今もやっているのか。

【事務局】25 歳同窓会は 2 年間で終了した。

【委員】すごくいい取組みだったのにもったいない。年末に帰ってくるというのもいいが、市から発信できるチャンネルがあるなら祭りなどを若者に向けて PR できたらいいなと思った。

【委員】別のプロジェクトで、いかにつながり続けるかという議論はしており、テクノロジーの活用も含めて動こうとしている。

【委員】今年は「集まる」行事がコロナでできない。誰が最初に始めるかが問題で、そういうものに市が最初に手を挙げてくれたらいろんな企画ができるようになるのではないか。勇気と決断がいるだろうが。地域のだんじりも参加者が少なくなった。地域の人に限定せず、地域の関係者であればだんじりが担げると間口を広くしたら参加者が増えた。転勤で来た人や外国人など参加したい人は多い。ただ、今はコロナ禍で催しができない。周りがやっていないからやめておこうになっている現状。どこが最初にするか、市も考えて欲しい。それによって地域の祭りが復活する可能性もある。今のままだと春先の出石初午大祭はどうするのだろうかと気になっている。来年やるかやらないかはこれから、11 月 12 月くらいに町内会で相談して決めるだろう。

【委員】転勤族の人からも「参加したいけど声がかからない」と聞いたりする。豊岡に来た外国の人と関わるのは、地域に居ながら外国のことを知るチャンス。郷に入っては郷に従えではなく、むしろ学ばせてもらうというスタンスを地域が持つ必要がある。市内にも在住外国人からいろいろな国の料理を教えてもらうイベントをしている NPO もある。来てくれた人に「教えて！」というスタンス。

【委員】柳まつりでも、地域の方だけでなく企業も連を組んで盆踊りをしている。みんなで参加するのがすごくいいと思う。

【会長】第 6 部にも記載するが、来年のトピックスで外国人との交流について取り上げてほしい。多様性を生かした開かれたコミュニティの視点で掲載してほしい。

目標像⑦「子どもたちが身近な地域の自然についてよく知り、大切にしています」

【事務局】画像の差し替えが漏れているが、グラフ「高校生等地域研究支援補助金」のグラフタイトルを「高校生等地域研究支援補助件数」に修正する。また、解説に補助上限額が変更になったことを追加した。前回の会議で、市が公表できる基準(例：PLAY 豊岡対象事業実施団体等)で

市内の自然体験活動実施団体をトピックスに掲載してほしいと意見があった。PLAY 豊岡の対象事業の実施者は民宿等多岐に渡っており、それを基準に自然体験活動実施団体とするのは難しい。また、PLAY 豊岡の実施は 2020 年度であり、「PLAY 豊岡対象事業実施団体等」として 2019 年度環境報告書に掲載することもそぐわない。今回は、一覧の形をとらず、NPO 法人但馬自然史研究所の本庄四郎さんに依頼し、活動内容や思いを書いてもらうこととしたい。

【委員】トピックスの写真の下に、活動場所も入れた方がいい。「竹野浜」と「宇日海岸」だと思う。

【会長】第 6 部に移る。

【委員】兵庫県版レッドデータブックの改訂版を 10 年に 1 回作っているが、作った人の平均年齢は 70 歳くらい。おそらく 10 年後は改訂できないと思う。ここで言いたいのは、生きものを調べる人のほうが早く、生きものより先に絶滅する状況で、何とか次の世代を作らないといけないということ。野球などのスポーツはきちんとリーグ戦などの成果を発表する場がありコーチもいて上を目指す大会がある。生きものにはそういう場がない。鳥に詳しい少年や昆虫少年がおり、生きもの調査で興味を持っている子どももいるが、植物を研究する子どもはいない。「生きもの検定」を実施して各学校の一番詳しい人を決めるとか、豊岡で一番植物に詳しい子を表彰する制度を作ることで、生物に関心のある子どもたちを増やしてほしい。

【会長】生きもの検定をやっている市町村はあるのか。

【委員】あると思う。

【委員】高校生等地域研究支援補助制度があるが、補助金額が少なすぎる。上限 5 万円では大したことができない。10 万円から 5 万円に減った尻すぼみの補助金と今の話はつながるのではないか。

【委員】科学系は県が実施する科学の祭典があり、賞をもらったり評価される仕組みがある。生物に対してもそういうことができるといい。個別の環境活動への支援もあると嬉しい。

【委員】保護者の立場としては、ぜひしてほしい。但馬にはプロフェッショナルがたくさんいる。その方たちが元気なうちに、子どもが専門的な方面から学ぶ機会がほしい。そのゴールに生きもの検定があって、施策の目標として次世代を育てることにつながる。

【委員】今、高校に生物部はないのか。

【委員】絶滅した。生物部はなくなり、生物科学部と名前だけ残してもらっているが活動はないような状態。

【委員】近畿大学附属豊岡高等学校・中学校には、生物に関わる活動をする部がある。

【委員】指導する先生がいない。生物の先生も、DNA 関係の試験管を使うような先生が増え、現地に出る人が少なくなったのが大きい。私たちみたいなコアな人は 10 年に 1 人いれば十分だが、私以降何十年も現れていないのが現状。植物も昆虫も同じ状況。

【委員】専門的な少年たちを称賛する仕組みがいる。

【会長】歴史も郷土史家が少なくなっている。来年度の予算要求で、例えば、コウノトリ市民研究所にコンテストの実施を委託する予算を要求することはできないか。

【事務局】政策的な事業に関しての予算要求はこれからだから可能ではあるが、受けてとの調整が必要であり、要求しても予算が付かないことは大いにある。

【会長】頑張る子どもを評価する制度はとてもいい取組みなので、ぜひ今後につなげてほしい。

【委員】郷土史も含めて全て環境教育でくくれる。

【委員】コンテストでネックなのが、集めたものを置いておく場所、収蔵施設がないこと。

【委員】子ども博士が順番にプレゼンするようなイベントがほしい。確か大人の発表会はあったはず。

【委員】何かに詳しい子をちょっとずつクローズアップできるように、子どもの発表会をしてほしい。

【事務局】欠席の委員から「子どもたちの純粋な感性と行動力は素晴らしいと実感しているので、積極的にふるさとの自然環境等について伝えて欲しい」と意見を預かっている。

【委員】中学校の夏休みの課題でしている自由研究がすごい優秀。夏休みの宿題に賞金をだすことはできないのか。

【委員】称賛は与えられても賞金は難しい。

【委員】優秀な自由研究を張って飾るだけでなくて発表の場をつくることはできないか。

【委員】優秀なものを作っているのだから、それに奨励賞とかつけて専門的な道に進むきっかけにできないか。

【委員】審査員をしていたが、非常に大人の手が入っていて、およそ子どもの発想ではありえないようなものもある。コンテストをきっかけに理科の研究をやめた学校も多い。優れた発表を作ることが重要になり、親も交えて面談までしたような学校もあった。そこにお金まで関わり大人の思いがたくさん入ると、理科嫌いの子どもを作ることになる。我々がよく言うのは、小・中学生は専門的なことをする必要はなく、集めたいものを集め、調べたいことを調べ、楽しい経験をすることが大事。知りたいからとことん調べる変な人間は 10 年に 1 人でもできれば十分。

【委員】小学生のころ運動会の徒競走で順位により賞品がもらえた。途中から平等教育が始まり参加者全員に同じものが配られるようになった。以降、徒競走で努力する小学生がいなくなった。委員の意見もよくわかるが、人間には欲があるから賞品・賞金があると努力する。たとえ親と一緒にしたとしても経験として評価していいと思う。ゆるくしすぎると参加意欲を削ぐことになる。ゆとり教育と詰め込み教育の議論になってしまうかもしれないが、私は出来のいいものにはいい評価を与えてほしい。

【委員】ビオトープ水田の実績でずっと 0 更新の地区がある。こういう風に結果を載せているだけでは増えない。増やしたいならピンポイントで、今年はこの地区をアプローチするくらいのことをしないと変わらないと思う。そういうことも検討してほしい。

目標像⑧「市民みんなが、ごみの減量化を実践し、1 人あたりの排出量が徐々に減っています」

【事務局】表「豊岡市人口(各年度末)」に世帯数を追加した。グラフ『「クリーン但馬 10 万人大作戦」参加人数・ごみ回収量』の数値を変更し、グラフタイトルに「豊岡市内」と明記した。ごみ回収量に、水路の泥上げででた土のうの重さが含まれていたが、それを除いた「燃やすごみ」「燃やさないごみ」の回収量に修正。また、もともと豊岡市内の実績であり前回グラフと対象範囲は変わっていないが、数値の見直しに伴い参加人数が若干変わっている。トピックスは、市役所で行っている紙のリサイクルについて記載している。リサイクルで作られたトイレットペーパーの実物を撮影して掲載する予定。

【委員】資源ごみ搬入量が減っていることは、どう解釈すればよいか。ごみが減っていると解釈するのか、資源ごみの分別ができていないのか。

【委員】私は後者と捉え、「もっともっとがんばろう」と言いたいと思っていた。燃やすごみは増えているから、人口が減っている以上のペースで資源ごみは減っている。

【委員】ビン・カンは確実に減っていて、燃やすごみは増えている。

【委員】ビン・カンは確実に消費が減っているだろう。

【委員】例えば、新聞をとるのをやめたとかもあるか。

【委員】資源ごみ集団回収量減少への影響はあるかもしれない。

【事務局】推測だが、段ボールや新聞紙を回収するボックスに出している分はこのデータには乗らないため、減ったように見えるのはあると思う。城崎のある村では村で回収ボックスを置いて、村で集めて持って行っており、それも集計されないだろう。そういう小さなものが減っていっているのかもしれない。

【委員】村で回収した分は、資源ごみ集団回収量に含まれないのか。

【事務局】申請をしているかどうかによる。

【委員】プラスチックの消費が減ったとは到底思えないため、分別ができていないのではないかと思う。

【委員】表を見ると人口は１万人減っているが世帯数が 130 件増えている。単身者が増えているということで分別が面倒でしない人も多いだろう。スーパーのトレイも洗えば資源ごみだが、そのままだと燃やすごみになる。

【委員】世帯数と電気使用量はリンクする。燃やさないごみが増えているのは、つまりいらないものを買っているということ。ペットボトルが減っていないのも残念。市民の意識を変えるための啓発活動をしていかないといけない。

【委員】重量換算なので、ペットボトルなんかは１本当たりの重量が大幅に減っているはず。半分以下になって量が横ばいということは本数が増えているということになる。

【委員】日本人は１日平均 1.5 本のペットボトルを捨てていると言われる。レジ袋は１日１枚。ごみ減量化の啓発活動は生活環境課に期待している。フードロスもこれだけ世間で言われているのでそういう視点が欲しいとも思う。

【会長】今の意見を踏まえてグラフの解説に説明を加えられるように考えたい。

【委員】啓発を一生懸命してもなかなか進まない。地域コミュニティの行事で飲食を出す時のガイドラインを作って、コミュニティの行事ではここまでやっているという見本として、分別などを指導できないか。経験して、「めんどうくさいから絶対しない！」という人もいるかもしれないが、「こうやって分別したらいいのか」と発見もあると思う。

【委員】レジ袋有料化に関して周りでよく聞くのが、ゴミ出しに困るという声。そんなことはない。工夫でどうにかなることを広報してほしい。

【委員】食パンやスナック菓子の袋で代用できる。

【委員】これも生活環境課だが、食品ロスについて、実は家庭が 45%で、そのうち野菜が 60%を越えている。なぜそれだけ野菜が捨てられるかというともったいない切り方が多いから。切り方を変えて煮込み料理に使ったり、そういうことを家庭科や食育で、環境配慮も踏まえて触

れることができたら。

【委員】PTA 活動で一緒に料理をしたときに、先生が全部燃やすごみに入れるよう指導していたのを見たときに同じことを思った。家庭科教育の中で取り組んでほしい。学校は事業所ごみだから家庭ごみと分け方が違うということがあるかもしれないが、家庭科の授業は家庭用ごみ袋に合わせて教えてほしい。

【委員】燃やすごみの 1/3 が水分。そのごみを燃やすのにエネルギーが必要になるし、負荷がかかるほど CO2 排出量も増える。

【委員】評価に資源ごみ集団回収量が減少しているとあるが、梱包・包装業界に問い合わせれば単体の重量変化の推移が分かると思う。そのへんをグラフとすり合わせないとパッと見ただけでは減っているのか増えているのかは分からない。そのあたりを考察して記載してほしい。

【会長】次回の参考とさせてもらう。

目標像⑨「市民みんなが楽しみながら省エネ行動を実践し、再生可能エネルギーの利用も増えています」

【事務局】グラフ「市街地循環バス(コバス)利用者数」の解説に、コロナの影響で 2019 年度末の利用者が減ったことを追加した。トピックスは、営農型ソーラーシェアリング２件を掲載している。

【委員】細かいことだが、グラフ「市街地循環バス(コバス)利用者数」の解説で、最後だけ「減った」となっている。他と合わせて「減りました」に修正してほしい。

【委員】公共交通機関の話でフランスはアプリを使って相乗りをすると補助金が出る。コロナで相乗りがしにくくなったが、環境に配慮するということでいえば、車を動かすなら人と一緒に使うという発想をメッセージとして出してほしい。介護や福祉関係の訪問でピストンするのが１日１回くらいある。その移動にプラスで違うこともできればという話を耳にした。そうすると車の利用が減り CO2 の排出も減る。バス会社も今は当たり前のように荷物も積み込むようになっているように移動手段を近くの人とシェアリングするという発想はこれから大切。

【委員】太陽光発電所の建設について、節度のある開発にしてもらいたい。福田に２件太陽光発電がある。１件は区にお金を入れているようだがもう１件はそうでないように聞く。地元に利益があるような運用をしてもらいたい。

【委員】但馬ではあまりないが、気候のいい地域では山を切り開いて建設する環境にとって非常に悪い例もある。下草も生えないので斜面の土砂崩れが起こりやすくなる。ここについては国も制限を厳しくすると思う。

【委員】トピックスの本文で、建設した２月は 2019 年度だが稼働した４月は 2020 年度に入っている。

【委員】「４月に稼働した」ではなく「４月の稼働に向けて」という表現がいいのでは。

【委員】営農型ソーラーシェアリングはいくら増えてもいいものか。

【委員】ここは農業も続けている。全ての農地でするというのはともかく、実験的に進めていくのはいいのではないかと思う。

【委員】上の事例は農福連携もしており、とてもいい事例に思える。営農型ソーラーシェアリングがたくさん増えていいものであったらどんどん奨励すればいいと思う。

【委員】この手のものは建設ではなく廃棄するときにどうするかというだけの問題。

【委員】耕作放棄地は増えているので、荒れさせるなら太陽光発電をやって少なくとも雑草だらけの土地ではなくするという発想で増やしていきたいと思っている。

【委員】パネルの耐用年数が終わった後にリサイクルはできないのか。

【委員】パネル構造がシンプルなため耐用年数は 35 年ある。廃棄の話題が良くのぼるのは廃棄事業者が楽しみにしているだけで、実際は廃棄よりも中古利用の方が増えている。あぜ道でもどこでも置いておけば電気を作ってくれるので捨てることはない。

【委員】発電効率は下がるが使い続けられるということか。

【委員】そのとおり。発電能力が下がるだけ。能力が下がったものを一等地に置く必要はないが、場所を変えて使い続ける。但馬ではあまりないが、千葉ではソーラーシェアリングが増えている。費用が掛かるのと雪が降る地域では架台にお金がかかる。夏の日照が過剰になっているのでそれを抑えるためにあえて直射日光を減らすというのは分かるが、そうでなければ積極的に選ぶ必要はない。架台は低い方が安定もするため、耕作しにくい土地の荒れ地対策として増やしていくのがいいだろう。山は絶対手を付けるべきではないし、基準は厳しくなる。

【委員】基礎に対する明確な基準もなく、仮設の足場に使うような物でも設置できてしまう。それが山の斜面だったりしたら地崩れの原因になり、実際によそで住宅に被害が出たところもあった。屋根にあげるのが一番簡単だし合理的。

【委員】建物の遮熱にもなるため省エネにもなる。さらに自家消費するといい。国や県も増やす方針ではあるが、設計基準は厳しくなる。環境配慮も徹底した上で税制など他の面でメリットを出していく方針。

【委員】防災の面でも、太陽光発電と蓄電地をセットで自分の使う分の電気を賄うのが主流になるだろうが、金額がまだ高い。国の補助が何百万という単位であると聞いたが、そういうものを使ってコミュニティセンターや学校にパネルと蓄電池をセットにしたモデルケースづくりに取り組んではどうか。古くなった施設の改修と合わせてモデル地区を選定するなど提案したい。

【委員】防災面でいうと、停電がこれだけ長期になるとは誰も思っていなかった。停電の時に太陽光発電が大活躍するということが分かってきたが、学校やコミュニティセンターにある太陽光発電が災害時に使えるかというと、方法の確認ができていない。もったいないし損失だなと思う。これからの動きとして、法人は EV をいざというときのバックアップ電源として持つ時代になってくる。わざわざ蓄電池を買うのではなく、車の大きな蓄電池を平時は移動手段として活用する。

【委員】自動車メーカーと提携して導入している自治体もある。電気自動車を太陽光で充電して緊急時は緊急避難所の非常用電源にする。

【委員】自動車メーカーもそういう売り方をしている。

【委員】満充電だと家庭の電気 3～4 日分まかなえるらしい。

【委員】各地につくられた太陽光発電所が電気を使える仕組みならそこで充電もできる。

【委員】何年か前に城崎も旅館に充電設備を作った。
【会長】蓄電池の話は第６部に記載する。

目標像⑩「環境をよくすることで経済が活性化され、交流も広がっています」
【事務局】グラフ「コウノトリの舞認証品」の解説に、登録品目を書き並べている。表「コウノトリ育むお米の海外への輸出状況」で、輸出国としてアラブ首長国連邦と記載していたが、担当課の表現に合わせ、「輸出国・地域」としドバイと表記する。グラフ「コウノトリ文化館来館者数(単年)」の解説に、団体客の減少について記載。トピックスは、コウノトリ育むお米の海外輸出について、実績や広がりのきっかけなどを掲載している。
【委員】環境経済認定事業者数のグラフがあるが、実は宣言している会社は少ないがエコ事業所宣言というものがある。時代に合わせて SDG s 宣言とかにしてもいいかもしれない。本来なら、環境経済課が実施する補助金を利用するような企業は必ず宣言しなければならないというような制約をすべき。世界的にはグリーンリカバリーというが、応援するなら少なくとも環境配慮を何か一つ宣言してくださいとする。ゴミを減らそうと思っているとかそういう宣言でいい。
【委員】市外からのボランティア活動はどんな内容か。次回のトピックスに 2019 年度にどんなボランティアがあったかについて載せることはできるか。
【事務局】具体的には、加陽湿地や田結湿地で保全活動や外来種駆除をしている。
【委員】そのボランティアは市が売り込んだわけではなくて先方から話があったか。
【事務局】先方からボランティア活動としてコウノトリ生息地保全活動をしたいという希望を受けて実施した。
【委員】農繁期や雪かき期に都会の若者に来てもらって、多くのボランティアを呼び込むのはどうか。留学生もゴールデンウィークは来てすぐで行くところもないし、田舎で歓迎してもらえたら喜ぶかなと考えていた。農家民宿を利用して応援できないか。
【委員】市として一括の窓口はあるのか。
【事務局】一括の窓口はない。コウノトリならコウノトリ共生課、と関係する部署が受けてボランティア活動の調整をしている。
【委員】なんとなくボランティアをしたいという需要はある。窓口を１本化できるといい。
【委員】草刈りですら学べる、機械を使う経験・体験ができるというニーズがある。
【委員】コウノトリ文化館来館者数の解説で「近年、ツアー等の団体客が減少していますが個人旅行客は定着しています」とあるが、団体客と個人客の内訳は出せるか。でないと定着しているという根拠がグラフでは分からない。
【委員】できると思う。来館者数から団体予約を受けている分を引き算すれば分かるだろう。飛び込みもあるため厳密な数字ではないが、傾向はわかる。ちなみに最近の入館者数は１日 200 人くらいに落ち着いている。団体客も少し増えてきたが１日３組ほどで、コロナ対策で１団体６～10 人といったところ。後は全て個人旅行。
【委員】城崎も GoTo トラベルにより予約が増えているが、移動手段は車。団体客はいないため公共交通はまだ利用が戻っていない。

【会長】第２部と第６部の審議は以上で終わる。

4　報告

・2017 年度温室効果ガス排出量について

5　事務連絡

・地球温暖化対策に向けての意見交換会質問回答

・管内視察の中止について

・委員報酬の振込について

6　閉会

・雀部副会長あいさつ